

「新任のご挨拶」

関西学院大学総合政策学部 教授 西野 桂子

2005年10月から今年の3月まで、年に半年以上、多い年は10ヵ月近くをスリランカで過ごしてきました。前半の2年間は開発調査、後半の5年間は技術協力プロジェクトのリーダーとして、スリランカの医療システムの発展に携わりました。両方とも、国際協力機構 (JICA) から委託を受け、専門家のチームを組み、スリランカ国の保健省が実施する医療システムの改善に協力する仕事です。私の担当はプロジェクトマネジメントで、保健省との交渉・調整から始まり、プロジェクトの計画・実施・評価、JICAへの報告等、多岐に渡ります。感染症から非感染症へと疾病構造の急激な変化に対応するため、「医療システムをどのように変更すべきか」が、スリランカ国の命題でした。毎日のように先方政府と協議を重ね、試験的導入を行い、フィードバックを基に修正し、再度導入するという繰り返しの結果、最終年度には全国600か所の一次医療施設で、血圧や血糖値の測定と生活指導を行えるようになりました。スリランカ政府の努力により、生活習慣病の予防対策を行える医療施設数は、現在も増え続けています。

思い起こせば、スリランカは2009年5月まで内戦中で、コロンボの街中にバリケードと検問が敷かれ、普通に歩いているだけで機関銃を向けられ、LTTE最後のコロンボ空爆に遭遇するなど、いろいろなことがありました。数分差で自爆テロを逃れた仲間もいたほどです。終結から1年ほどたったころ、激戦地であった東部や北部州の調査に携わることができました。広大な地雷原にかりうじて除去が終わった一本道、頭部が吹き飛ばされ墓標のように見えるヤシの木など、30年近く続いた内戦は、スリランカに大きな爪痕を残しました。北端にあるジャフナの街では復興が進んでいますが、人々に植え付けられた恐怖は拭い去れるものではありません。

スリランカの内戦が始まったころ、私はバングラデシュのダッカで、ユニセフの職員として勤務していました。問題が山積するバングラデシュで、そのころ産声をあげたのがグラミンバンクです。今では知らない人がいないぐらい有名なモハムド・ユヌス氏ですが、貧困者に無担保でお金を貸す銀行という「イノベーション」に当時賛同する人は少なく、資金集めに大変苦労されていました。ユニセフは、「農村女性の起業・就労につながるかもしれない」と、銀行員の訓練を支援した記憶があります。それから30年、国際協力の分野も大きく変化しました。もはや援助ではなく、対等の協力関係を如何に構築するかが重要になっています。

個人的な関心・研究テーマも国連研究、社会・ジェンダー研究、評価研究、非感染症・医療システム研究、BOP・ソーシャルビジネス研究と、時代と共に少しずつ広がってきました。日々変化する国際協力の分野に少しでも多くの学生に関心を持ってもらい、将来の担い手を増やすとともに、今後の協力の在り方につき、引き続き研究を続けていきたいと考えています。どうぞよろしくお願ひします。